

[生徒指導]

異学年交流活動を中核とした小・中9年間の一貫性のある 社会性育成の取組

－中学校区連携による3年間の実践を通して－

外立 努*

1 はじめに

子どもを取り巻く社会・教育環境の急激な変化から、子どもたちの人間関係のトラブルを原因とするいじめや不登校の増加が問題となってきた。特に小学校から中学校へ移行する時期に、この傾向が顕著に表われてくる。

当校は過疎化、少子化の進行に伴い、学校統合を重ねてきた。特に広い学区に小規模集落が散在する状況であるため、幼少の頃から地域における子ども同士の仲間遊びが難しい環境にあり、交流の機会は少なくなっている。また、ほぼ同一の集団で進級するため、友達関係が固定化しやすく、集団内の仲間づくりに躓くことがきっかけになり不登校傾向に陥ってしまうケースも見られた。また、児童へのアンケート調査の結果では、「自分によいところがある」と肯定的に答える割合が約76%と低い傾向があり、他者と関わる中で育つ自己有用感が不十分であると思われる。新井田・黒川(2010)¹⁾は、人間関係のトラブルを解消する方策として、中1ギャップの解消事業に取り組むことは、小学6年生の児童同士のつながり、中学校生活へのつながり、職員同士のつながりが生まれ、有効な手立てであることを実証している。同時に、つながりを円滑にするために、活動を各学年の単独レベルから、小・中9年間の連続したレベルにしていくことが今後の課題であるとしている。

当中学校区3校(中学校1校、小学校2校)の児童・生徒の現状を振り返ると、穏やかでとても素直な反面、「人とかかわることが苦手な子どもがいること」が特徴としてあげられる。友達同士のささいな言動からトラブルになり、いじめや不登校傾向につながるなどの問題が比較的多く見られることも判明している。国立教育政策研究所生徒指導研究センター『子どもの社会性が育つ「異年齢の交流活動」』(2012)²⁾は、意図的・計画的に異年齢の子どもを交流させることが大切であり、そのことを通して自己有用感などの社会性を高める必要性が述べられている。

このような実態から、いじめ不登校等の課題を解消するためには、小・中9年間の連続した取組を通して、自己有用感の育成や人間関係づくりの能力の向上といった社会性をはぐくむ取組が必要であると考ええる。

そこで本研究では、社会性を育成する有効な手段として異学年交流を位置づける。そして、広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センターの研究報告である高橋(2004)³⁾を受け、異年齢の児童生徒がかかわり合いによって獲得することを期待できる資質・能力を次の3つの要素としてとらえ、これらが社会性育成に及ぼす効果を検証する。

① 愛着・信頼感

児童生徒に思いやりや気持ちや尊敬の念といった相手に対する肯定的な感情、意識が生じ、このことが児童生徒の精神的安定につながり、対人関係等社会性の発達に重要な「愛着・信頼感」がはぐくまれる。

② モデルの形成

愛着を感じている相手に尊敬の念や信頼感をもつことで相手の言動を好意的にとらえ、「モデルの形成」が促進される。バンデューラ(1977)⁴⁾は、道徳的な行動が獲得されるためには、よい行動をして褒められたり、悪い行動をして叱られたりといった社会的強化の随伴性だけでなく、モデリングによってなされると主張している。

③ 自己有用感

愛着を感じている相手から肯定的な評価を得ることによって「自己有用感」を高めることができる。高橋(2004)⁵⁾は、「自己有用感」は規範の内在化を促進し、児童生徒の自律的な行動を強めるために必要であると述べている。

* 妙高市立妙高小学校

2 研究の目的と方法

中学校区の児童生徒の社会性について現状を分析し、3校が連携して取り組むための組織を確立させる。小・中学校9年間を見通した過程で、小・中の異学年交流活動を実施することを通して、意図的に多様な人との交流や体験活動を経験させ、児童生徒に社会性が育つことを3年間の実践を通して検証する。更にその過程で、いじめや不登校といった生徒指導上の諸問題を未然に防止していく手立てを講じていく。

小・中学校9年間を見通した過程での、児童生徒の社会性育成の道筋をあらわすイメージを下図のように考えた。

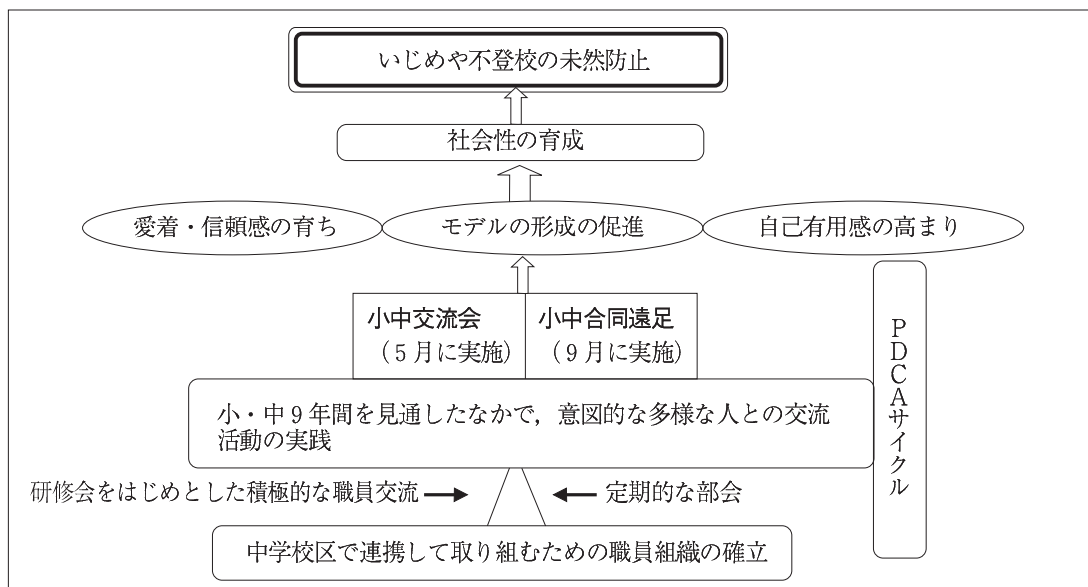


図1 中学校区における社会性育成のイメージ図

3 実践の概要と成果

(1) 中学校区3校が連携をして取り組むための体制作りの工夫

中学校区で連携を図るためには、教職員同士の連携が円滑にできるようにならなければならない。そこで、小・中連携組織を立ち上げ、各部署で具体的に動いていくことにした。校長、教頭といった管理職が月1回程度、小中連絡会を実施し、小中連携の基本方針を策定したり、調整を図ったりする。図2は連携組織図である。妙高中学校の加配教員と妙高小学校の加配教員、そして新井南小学校の教務主任が常設部会に属し、できる限り金曜日の午後に部会を設け、小中交流活動の企画などの打ち合わせや準備を進められるようにした。また管理職以外の教職員は、全員特設部会に所属することにした。特設部会は、学習指導部会、心の教育部会、生活・健康部会、特別支援教育部会、教育支援部会から成り立ち、いずれも、小中連携を基本とした内容の取組を推進していく。学習や生活のきまりについては、3校が同じ内容になるように特設部会で話し合った。その結果、教師側の指導内容や児童生徒の意識が一貫したものになった。また、生活習慣の改善についても、3校が同一歩調で指導ができるよう、取組カードを共通のものにしたり、小中合同学校保健委員会を開催したりするなどの工夫をした。

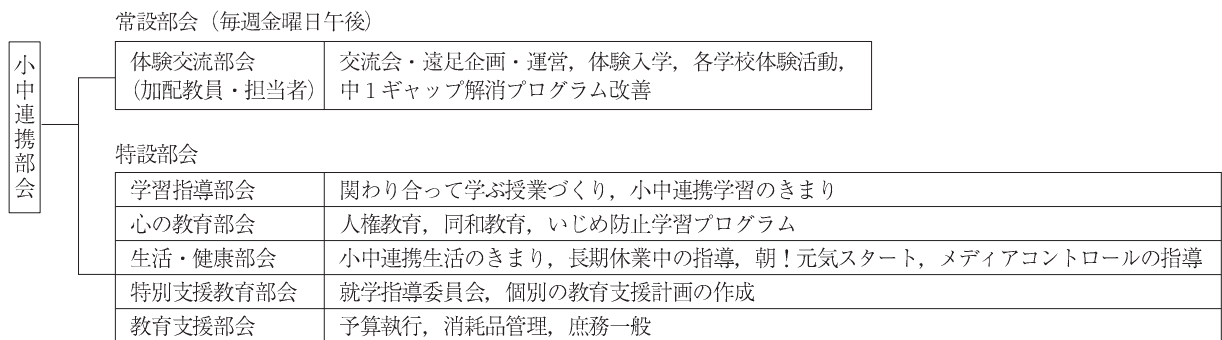


図2 中学校区活動組織

(2) 異学年交流の実際

多様な人との交流機会の創出のため、2つの交流活動を設定した。1つめは5月の「小中交流会」、2つめは9月の「小中合同遠足」である。社会性育成部会担当として2つの交流活動を実施するにあたり、中学校区の児童生徒の実態を踏まえたうえでの内容を考えた。以下は班編製の面、それぞれの活動同士のつながり等、そこに込められた願いや意図である。

① 「小中交流活動」と「小中合同遠足」に込めた願い・意図

(ア) 「小中交流活動」と「小中合同遠足」のねらい

「小中交流活動」と「小中合同遠足」のねらいは共通とし、以下の3点をあげた。小中異年齢の交流活動を行うことを通して、児童生徒の自己有用感を高めるとともに人間関係能力の育成を図る。異年齢交流活動を継続することで、児童生徒のメンバーシップの育成を図る。地域の方との交流や自然体験を通して、地域と一層の深まりを強めるとともに、地域のよさを感じる機会とする。このねらい達成に向け、中学校区で連携して児童生徒の実態を把握し、社会性を高めるための手立てを講じた。

(イ) 班編製の工夫

1つ目は、できるだけ少人数班を作る。班の人数を少なくすることで、より深い交流と、より多くの中学生にリーダーシップを発揮させる機会とした。小学生にもあいさつなどの役割を与えることで人の役に立つことを実感させるようにした。2つ目は、3校の児童生徒が必ず混ざった班を編成する。そうすることでより幅広い交流をねらった。3つ目は、交流学年を単位として班編成とした。小学1年、6年、中学3年を青チーム、小学2年、4年、中学2年を赤チーム、小学3年、5年、中学1年を黄チームとした。全部で48班編成となり、一班が7名前後となった。どの班も必ず中学生がリーダーとなり、3年生ばかりではなく、2年生と1年生もリーダーとして活躍できる編成とした。

このような班編成は、1年目に初めて行ったときの反省に基づいている。1年目は交流学年を単位とせず、小学1年生から中学3年生すべての学年、学校が混ざった班編成をした。一班20名程度となり、班内の交流の深まりが今一步であったことと、班長が中3の一部に限られ、多くの児童生徒の役割が明確になっていなかったという課題を改善した。

(ウ) 「小中交流活動」から「小中合同遠足」へとつながりをもたせた意図

5月に班の仲間と初対面し、「小中交流活動」を行う。そこで打ち解けた仲間と、9月の「小中合同遠足」で再会を果たす。学校や学年は違っていても知っている仲間との活動は安心である。9月の遠足では、中学生はよりリーダーシップを発揮し、小学生は協力して活動を成功につなげることが大切となる。メンバーは班に対しての「愛着」があるであろう。小学生は中学生の言動を「モデル」として模倣するかもしれない。さらにそれぞれの役割を果たすことで「自己有用感」が高まることを期待した。

② 実際の交流活動の様子

(ア) 「小中交流会」(5月)

交流会の事前に各校で事前指導の際、交流活動に臨むめあてを考えさせた。漠然と参加するのではなく、目的意識をしっかりともたせて参加をさせたい意図があった。交流会に臨むにあたって、下記のようにしっかりと目的意識をもって臨もうとする気持ちが伝わってくる文章が多かった。

小中交流会の事前指導におけるめあて

- ・ 妙高中、南小、関係なく話をして仲良くなりたい。
- ・ 知らない人がいても自分から声をかけていきたい。
- ・ 班のみんなの名前を覚えます。
- ・ 他の学校とも仲良く協力して、深く交流したい。
- ・ 6年生らしい行動をして、低学年の見本となる。
- ・ はずかしがらずに中学生とも話をする。班のみんなが協力して、みんなが「楽しい」と思えるような活動をする。
- ・ 小学生が楽しめる活動を考え、リーダーとしての声かけをしっかりとしたい。

主な活動は、班の中学生が考えた交流活動である。中学生は風船パス、フラフープくぐり、ジャンケンゲーム、新聞紙のパズル等工夫を凝らしたものを考え、小学生に対してやりかたの説明、注意すること等リーダーシップを発揮していた。小学生も楽しそうに活動する様子が見られた。

小学校職員の反省の「交流学年を単位とした班編成にしたことで、中学生はどの学年も最上級生となり、責任をもつ

て取り組んでいたと思う。人数もちょうどよかったと思う。小2も1番下の学年となったため、中2のお兄さんお姉さんに甘えて楽しそうだったのが印象的だった。」という記述からも、班編成の工夫が効果的であったことがうかがえる。

また、各班ごとに撮影した写真を校内に掲示することを、名前を覚えたり9月の合同遠足での再会を楽しみにしたりできるようにした。全ての取組を3校共通にすることが大きな連携の一步となった。

(イ) 「小中合同遠足」(9月)

「小中合同遠足」は、5月の「小中交流会」と同じ班の仲間が再会をし、協力してゴールを目指して歩き通す活動である。この遠足では、コースの設定と交流学年の組み合わせを以下のように工夫した。

- ・コースは学区にあり、3種類の交流学年が歩くために3コース用意した。青チーム(小1・小6・中3)は平丸コース、赤チーム(小2・小4・中2)は、花房山Aコース、黄チーム(小3・小5・中1)は、花房山Bコースとした。花房山コースは出発地点とゴール地点がそれぞれ逆になる。毎年合同遠足を実施していくことで、中学校3年間で1回ずつ各コースを経験できる。小学校6年間では2回ずつ経験できることになる。また、次の年に同じメンバー同士が班にならないように交流学年の組み合わせを工夫した。

(3) 異学年交流の3要素からとらえた児童生徒の意識の変容の分析

「小中交流会」及び「小中合同遠足」の異学年交流から、児童生徒の意識にどのような変容がみられたかについて考察する。その際、それぞれの活動後の振り返り作文を異学年交流の3要素から分類し、分析する。

当中学校区では、小中学校9年間を見通した交流活動を実施してきた。この取組を始めて今年度で3年目を迎えている。1年目は初めての経験であったため、特に中学生は不安に感じていた。小学生に対してどのように接してよいのか、班長の言うことを素直に聞いてくれるのか、班長として喜んでもらえるのか等、心配をする声も聞かれた。1年目の「小中交流活動」の中学生の振り返り作文に以下のようなことが書かれていた。「活動の中で発見したことは、あまり話をしない子には、自分から声をかけると、すごく話をするようになることです。」「小学生のリズムや話についていくことをがんばりました。職場体験での保育園でのことがいろいろ役立ちました。」など、小学生との交流は難しいなりにも試行錯誤をしながら交流を深めていこうとする前向きな姿勢が見られた。事前指導で中学生としてのリーダーシップや小学生としてのフォロアーシップについて指導したことも、そのような行動につながったと考える。

2年目の振り返り作文から、異学年交流の3要素(愛着・信頼感、モデルの形成、自己有用感)の形成をみとる。

【愛着・信頼感】

- ・知らない人に声をかけて仲良くなった人がいます。今度会うときもいっぱいしゃべりたいです。
- ・私はどちらかというと小学生が苦手だったので、遠足の前はあまり行きたくなかったです。でも、実際に遠足が始まると小学生がすごく元気いっぱい、その元気がこっちにも伝わってきて、とても楽しく遠足ができました。めったに小学生と一緒に交流することはないので、とても良い機会になってよかったです。
- ・中学生や他の小学校の人にも自分から声をかけられたのでよかったです。小中合同遠足の時にはもっと仲良くしたいです。

5月の出会いの活動によって積極的に声をかけたことが、9月の遠足での再会が楽しみにつながり、次への期待感がうかがえる。自分から相手に対して何らかの働きかけをしていることが分かる。

【モデルの形成】

- ・自分のめあての他校の人となかよくなることは、達成できたと思います。うれしかったのは、一番心配していた中学3年生と話せたことです。とても優しく私もそんな中学生(人)になりたいと思いました。反省したことは、1年生のフォローです。自己紹介の時に動揺していた子がいたのに、どうすればよいか分からずそのまま見ていました。中学生がフォローしてくれました。次に行われる小中合同遠足でしっかりとフォローして、下学年を助けてあげたいなあとと思いました。
- ・中学生が水を分けてくれてうれしかったです。いっぱいおしゃべりをして楽しかったです。声をかけてもらってうれしかったです。

相手に対してやさしくしたり、水をわけてあげたりと、相手のためを思っていた行動が「モデルの形成」につながったと考える。小学生は中学生の模範となる言動に対して、自分もいつかそうになりたいという感情が生まれていった。追体験の中に、自分が中学生になったときにそうありたいとイメージしやすいことは、9カ年の連続がなせることである。

【自己有用感】

- ・「班のみんなをまとめたり自分から話しかけるのは大変そう」と少し気が重かった私ですが、当日実際に小学生会ってみると、そんな気持ちはすっかりなくなっていました。何より、小学生が私の頼りない指示にきちんと従ってくれて、逆に助けられました。小学生からも話をしてくれるようになって、とてもうれしかったです。
- ・大変だなあという気持ちがありましたが、1年生の子が「ぼく、今日はすごく楽しみにしていたんだ。」と言ってきて、驚いたのと同時に、楽しませてあげなくてはという思いがこみ上げてきました。実際に班のみんなをまとめるので大変だったけど、小学生が自然と手をつないできてくれたり、積極的に話してきてくれたりしたので自分自身も楽しむことができました。



写真1 小中合同遠足の様子

自分の指示に従い、頼ってくれた小学生に対する思いが、喜びに終わらずに感謝にまで変わっていつている。心情を素直に表現できる小学生の言葉から、今日の目的を再認識する中学生の姿が読み取れる。目的を達成できた喜びや、相手からかけられた言葉により自分は相手の役に立っているということに気付いていったことが伺える。活動に臨む前は自分に自信がもてず、不安をもちながら参加していた児童・生徒が、メンバーのみんなから頼りにされていることを感じ、その期待にこたえていこうとする意欲をもち、自信をはぐくんでいったのであろう。

以上のことから、交流活動に臨むめあてを考えさせたことで、めあてを意識して交流会に臨むとともに、そのことを振り返る児童生徒の姿がみえてきた。

4 社会性育成の成果についての考察

「小中合同遠足」後に、中学校区3校で共通内容の事後アンケートを実施した。アンケートの項目は新潟県教育委員会の見解⁶⁾に沿って、4つの社会性に関連した内容の13項目を掲げた。4つの社会性とは次のようなものである。①自己有用感 ②人間関係づくりの能力 ③規範意識 ④困難に対して、他者と協力しながら問題を解決しようとする意欲や態度。これらは、図1に示したように、異学年交流によって3つの資質能力が高まっていれば、効果的に育成されるのではないかと考えられる。そこで、このアンケートの結果について考察する。具体的な内容は表1のとおりである。小学校低学年には内容は変えずにわかりやすくしたものを実施した。

3校のアンケート結果を肯定的な回答に絞ってまとめたものが表1である。2年間の比較をすると、育てたい社会性の肯定的評価のいずれも伸びていることが分かる。人間関係形成能力と問題解決への意欲については、1年目は80%台であったが、2年目はいずれも90%台に伸びた。伸びた大きな要因は、班編成の工夫であると考えられる。交流学年を単位とし、班の人数が20名前後から7名前後になったことで、班内でのより深い交流が促進されたこと、班長をする人数が大幅に増えたことで役割が明確化したことが効果的であったと思われる。

表1 小中合同遠足後の児童生徒アンケート項目

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
質問項目	遠足で自分ができることは、ほかの人にたよらず、きちんとできましたか。	楽しい遠足になるように、自分から同じはんの人に話すことができましたか。	同じはんの人と、お友だちになれるように、話をしたり、いっしょに歩くことができましたか。	自分から「おはよう」「さようなら」「ありがとう」「ごめんなさい」のあいさつを大きな声ですることができましたか。	中学生や先生にたいして、敬語を使うなど、きちんとした言葉づかいをするすることができましたか。	下の学年のお友だちのようすを見て、やさしく声をかけたり、たすけてあげるすることができましたか。	遠足のきまりをきちんとわかって、遠足に参加しましたか。	遠足のきまりを守ることができましたか。	まわりの迷惑にならないか考えて、こままとときは自分から話をすることができましたか。	わがままをいわずに、最後まで活動できましたか。	こままといる人に、自分から手伝ってあげることができましたか。	上の学年の人の役に立とうと、自分からできることを進んでやることができましたか。	遠足での自分の目標をたつせいすることができましたか。
育てたい社会性	自己有用感	人間関係形成能力	人間関係形成能力	人間関係形成能力	人間関係形成能力	自己有用感	規範意識	規範意識	規範意識	自己有用感	問題解決への意欲	問題解決への意欲	自己有用感

交流が深まったことは、「小中交流会」や「小中合同遠足」の振り返り作文からも伝わってくる。交流が深まることで「愛着・信頼感」が増すことにつながる。参加するにあたって、相手のことを考えた言動が積極的になされていた。小学生も中学生のよい言動に感動し、それが「モデルの形成」につながっていった。さらに、相手からかけられた言葉により自分は相手の役に立っているということに気付き、「自己有用感」を感じられるようになった。このような要素ははぐくまれたことが社会性の育成にもつながったと考える。さらに平成25年度の全国学力調査の結果、中3の「自己有用感」に当たる質問内容の平均値は36.4%であり、県(23.8%)より12.6ポイント、全国平均(24.0%)よりも12.4ポイント上回る結果が表れていた。平成24年度は29.4%であったことから、3年間の積み重ねの有効性を見出すことができる。

表2 社会性に関するアンケート結果

育てたい社会性		自己有用感	人間関係形成能力	規範意識	問題解決への意欲
H23	肯定的評価（全体）	92%	86%	95%	81%
H24	肯定的評価（全体）	98%	94%	98%	90%

5 今後の課題

中学校区小・中学校9年間を見通した過程で、意図的に多様な人との交流体験活動実施することを通して、児童生徒に社会性が身に付いてくることが考えられる。3年目の今年度も取り組んでいる最中である。しかし、社会性は短期間で身につくものではない。交流活動後のアンケート結果からは社会性の伸びも明らかになったことは事実であるが、児童生徒の日常生活全般においてどの程度の成果が出ているのかを今後検証していく必要がある。小中交流活動における小学校側の反省点で、「普段リーダーとして活躍している6年生が役割を發揮する場面に乏しい。」という意見も出た。そのため、全職員が社会性は簡単に身に付くものではないという認識をもち、今後も体験活動の内容等を工夫し、その評価と改善を行い、次の活動に生かしていくことも大切である。

中学校区全体のいじめや不登校数も数年前と比較し、少なくなってきた。これは連携することで中学校区での職員の意識も高まってきたことも一つの要因として考えられる。しかし、中学校に入学してからの生徒同士のトラブルの中に、小学校時代から引きずってきた問題も潜んでいることがある。今後は小中職員が今まで以上に日常から情報交換し、トラブル解消へのより適切な指導をしていく体制づくりに取り組んでいくことが必要である。

引用・参考文献

- 1) 新井田義一・黒川 健 『子どもたちの一体感を醸成する中1ギャップ解消事業の推進』、『教育実践研究第20集』、2010年
- 2) 国立教育政策研究所生徒指導研究センター 『子どもの社会性が育つ「異年齢の交流活動」』、2012年
- 3) 高橋 超 『社会性の育成を目指した生徒指導の在り方に関する研究Ⅱ』 広島大学大学院教育学研究科付属教育実践総合センター、2004年、67～68pp
- 4) 『新児童心理学講座 第10巻』 金子書房、1991年
- 5) 3) と同掲書、68p
- 6) 新潟県教育委員会発行 『いじめ、不登校、暴力行為のない明るい学校づくり（第3集）』、2013年